

FEATURE 2

青山に魅せられる

トレンドが集まる街、青山。

新しいものが好きで、お互いの個性を見せ合う若者が街路を行き交う。それはまるで訪れた人々が舞台上で共演しているかのようだ。

建築が街の中で「舞台空間」をつくり、青山らしい風景を生み出す。

人々はそんな青山に魅せられる。



WORKING

舞台上働く

多くの人が行き交う青山通り沿いのオフィスビル。その足元に大きくつくられた広場では、一日の中で様々な人の活動を見ることができる。朝はワーカーが颯爽と歩くランウェイ、昼はランチを楽しむための憩いの場、夜は仕事が終わりと、同僚と待ち合わせる場。広場の賑わいが青山通りへ染み出すことで、働く場と街がつながる情景が作り出されている。



LIVING

栈敷に住まう

栈敷(さじき)とは、劇場などの一段と高く設けられた特等席のことをいう。青山の空へと伸びる曲面状の建物では、栈敷のように全ての住戸から東京の景色を一望できる。建物の足元につくられた丘には植栽が連なり、緑豊かな景観を創出している。東京の高層建築が立ち並ぶ美しい眺望と緑を愉しみながら、そこにしかない青山の生活を送ることができる。





WORKING

エイベックスビル

青山に広げられた舞台

エンターテインメントを通じて、時代のトレンドを発信してきたエイベックス。その新社屋が青山の地に建てられた。それは単なるオフィスビルではない。中層ビルや商業施設が位置を揃えて立ち並ぶ青山通りに対し、建物の足元には、40m×30mの広大な広場が設けられた。ベンチや背丈の低い植栽帯を設けることで、見通しの良い人々の溜まりの場がつけられる。広場は、道行く人の交差点や街のイベントスペース、ワーカーの憩いの場にも姿を変える。オフィスビルの足元に人々が集い賑わい、街と働く場の新しいつながりが生まれる。



時のうつろいを感じさせる背景

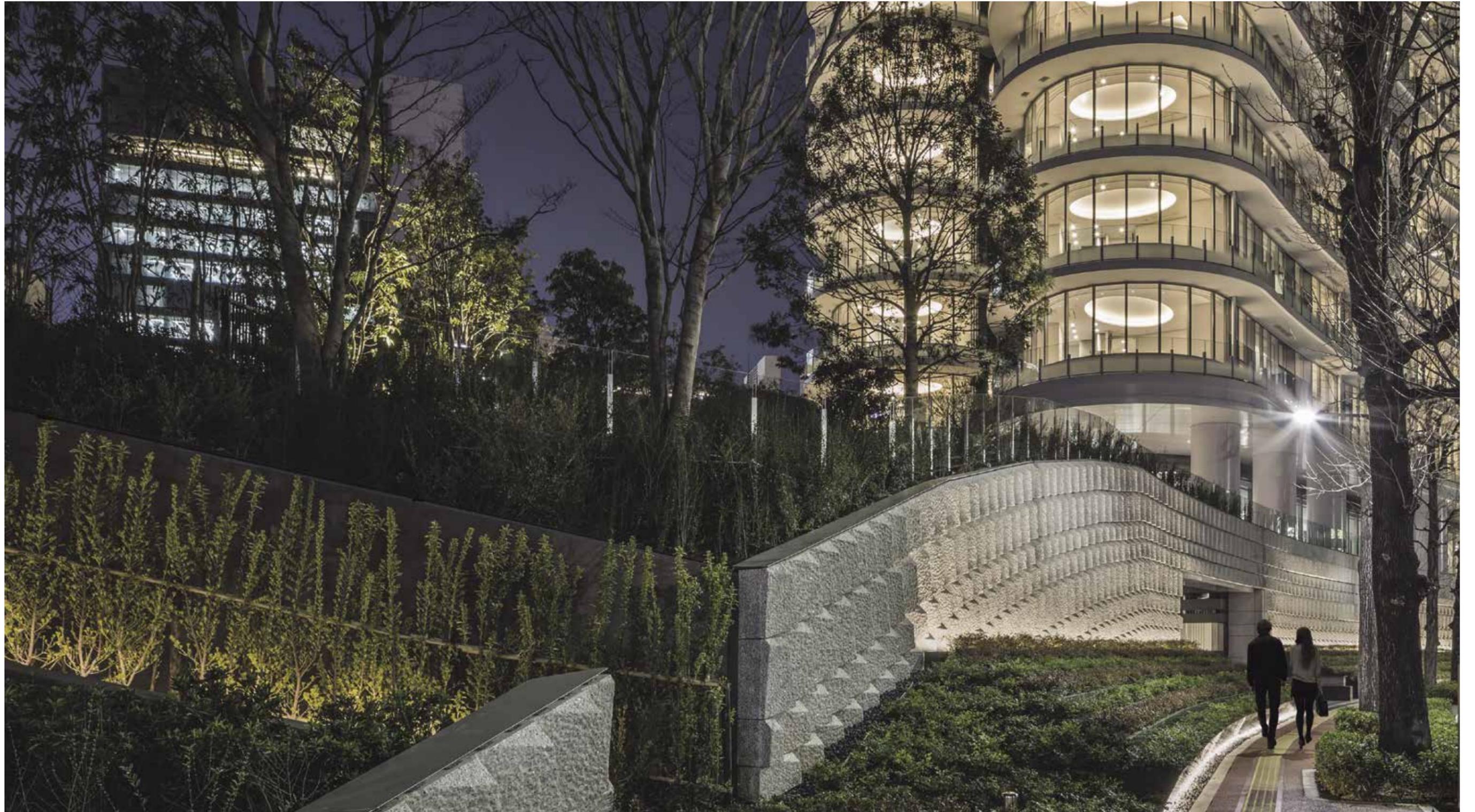
エイベックスの新社屋は、青山通りに立ち並ぶ建物群より30m後退して立っている。そのため青山通りの歩道を行き交う人々も、空に向かって垂直に伸びる姿を捉えやすい。建物を覆うガラスに青い空やオレンジ色の夕焼けが映り込む。その空模様が道ゆく人々の視界に入り、一日のうつろいを感じることができる。舞台背景としての姿は、働く場でありながら、街のシンボルとしても青山に溶け込んでいく。



立体的につながる第二の舞台

広場を抜けたエントランスホールには、1階から2階へ立体的な吹抜空間と大階段が続く。大階段を登った2階にはホールが設けられ、ワーカーの二つ目の舞台となる。ホールの大きなガラス窓は、遠くに見える六本木の眺望を豊かに取り込み、ワーカーの集いの場を演出している。大階段を振り返ると、ガラスの玄関に広場からの青山の賑わいが入り込んでいることが感じられる。ワーカーは広場の賑やかな風景に魅せられ、オフィスに居ながらも、街とのつながりを感じることができる。





LIVING

パークコート青山 ザタワー

都市と緑の風景を愉しむ

道に沿ってつくられた小高い丘に、緩やかな曲面の建物が現れる。バルコニーの床を住戸内より低くし、住戸内から外を望む視界には手摺や設備機器などが入り込まない。さらに窓が曲面状の全面ガラス張りとなることで、そこに立つ人は東京のパノラマビューに囲まれる。まるで劇場の桟敷(さじき)のような住まいで、住人は青山の緑が際立つ美しい都市の風景を愉しむことができる。夜には、住戸から漏れる光が閑静な公園と住宅街を柔らかく照らし、桟敷から一変して舞台空間となる。



都市に浮遊する空と水の空間

最上階に位置し、まるで水際と空が連続しているかのように見えるインフィニティプール。曲面状のガラス窓から青山の眺望を取り込むことで、空の上にある水の空間を演出している。水の中に身体をあずければ、都市の上空に浮かぶような感覚になる。夜は、緩やかな曲線を描く天井照明がガラスに反射し、都市の夜景に光のラインが浮かび上がる。照明の光は、天井と空が連続しているかのように錯覚させ、訪れる人々の記憶に残る印象的な場所となる。

青山の風景としての姿

建物の形状は、私たちが思い浮かべる集合住宅とは一線を画した形状であり、青山のシンボルとして風景をつくっている。建物の足元では、丘の緑地と公園が連続している。そこには青山の豊かな緑と街並みに惹きつけられた多くの人が集う。木々の間を駆け回る子どもたち、それを見守りながら愉しげに会話をする夫婦、ベンチでゆっくり過ごすカップル。そうした街の共演者がつくる一つ一つの場面が青山のシンボルに寄り添い、街を彩っている。

